

ヴァンデ戦争におけるカトリック王党軍の組織

フランス革命期の地方反乱について

大島 幸之介

はじめに

(1) フランス革命史におけるヴァンデ戦争

ヴァンデ戦争は、フランス革命期、1793年に勃発する反乱である。フランス西部、ヴァンデ県を中心に四県にまたがる地域で起こったこの反乱は、革命政府から反革命蜂起と目され、その指揮下にある共和軍との間で非常に激しい戦いが繰り広げられた。「フランス革命とアンシャン・レジームが野戦で対決した¹」とはフュレの表現だが、その対決は苛烈であり、内戦の様相を呈した。この蜂起に対する共和軍の弾圧は、特にヴァンデ軍が劣勢に追い込まれて以降徹底的に行われ、ヴァンデ戦争中に失われた犠牲者は二十数万とも、それ以上とも言われる²。こうした巨大な被害を出すに至るには、革命政府のヴァンデに対する極端なまでの悪魔視が存在した。ヴァンデは共和国に対する脅威とみなされていた。

現地で実際にこうした脅威を作り上げたのは蜂起民衆の組織化を試みたカトリック王党軍である。アンシャン＝レジームの象徴である、「カトリックと王」という旗印の下に集合した、農民層を中心とする民衆が、反革命の中でも最大規模の内戦を繰り広げるにいたった。本論では、1章においてフランス革命研究の動向と、その中でのヴァンデの位置を概観したのち、後の章でヴァンデ戦争の経過および性質と、最後にカトリック王党軍 *L'Armée catholique et royale* の組織について検討し、その実態について明らかにする。

革命史上で無視し得ないものとして、正統主義と修正主義の論争が存在するが、ヴァンデに関してもこれは例外ではない。正統的解釈においては、1789年から94年、その先に至る革命の過程は偶然ではなく、一貫した構造の下に捉えられた。この視点では、ヴァンデは、「革命という必然的過程から逸した存在」であり、反乱分子に過ぎなかった³。彼らにとって、反革命は常軌を逸したものであり、革命に反発した動機を探る事が主で、その内部の詳細な実態にまで注意が及ぶ事は少なかった。ミシュレ、シャサン、デュブレイユ、ウォルターらの研究においても、大枠において、無分別で狂信的、盲目的なヴァンデ民衆が貴族や聖職者の陰謀に乗せられた事によって起こったと考えられていた⁴。

1950年代から60年代に入り、修正主義側からの問題提起に伴い、反革命運動、ヴァンデに関する研究も増加した⁵。ボワは『西部の農民』においてサルト県の農村共同体を分析し、財産・土地所有から見た都市―農村関係、農民の構成、旧制度下の領主への貢租や、生産力・課税の重さといった要素を検討し、共和派に留まった地域と比較した⁶。ティリィは南アンジューの地域内を農村の経済状況を比較分析し、都市化の進行が遅れた地域で革命への抵抗が強い傾向があると主張した⁷。プチフレールは、大小の名士や都市の手工業者と言った層の存在を明らかにし、都市/農村構造のみでは説明出来ない事を示唆した⁸。80年代に移ると研究はさらに多様性を増した。ル・ゴフやサザーランドは、教会財産の国有化と売却において、西部地域では大土地所有者が少数で財産購入に参加

出来ず、農民が恩恵を得られなかった点を指摘した⁹。テルール・暴力の観点からも、マルタンを中心にヴァンデで行われた虐殺・弾圧の詳細と、その記憶の長期的影響にも研究が及んでいる¹⁰。

従って、本論では、主にマルタンの研究を参照しつつ、より王党軍の組織としての面に焦点を当てて検討する事を通して、反革命のシンボルとして強烈なイメージを持たれてきたカトリック王党軍の統一性に対して疑義を投げかけ、従来の視点を改めることを目的とする。

1. ヴァンデ戦争の性格

(1) 戦争勃発の背景とその特徴

1793年の3月に始まるヴァンデ戦争は、同年、革命に対抗して起きた反乱の中でも、最も大規模かつ長期的なものであった。「説明しがたいヴァンデ」とは国民公会議員バレーが述べた言葉であるが、革命側にとってヴァンデは理解のしがたいものであった。農民解放の革命に対し立ち上がる農民、平等を目指した革命に対して旧特権層と結ぶ地方民衆。これが、ヴァンデにおける貴族・僧侶の陰謀という観念を呼び起こした¹¹。ここでの、“ヴァンデ”は行政上の区画では分類できない、メヌ＝エ＝ロワール、ロワール＝アンフェリウール、ヴァンデ、ドゥ＝セーヴルの四県にまたがる「武装されたヴァンデ La Vendée militaire」地域であり、ロワール川以南、東西に100キロ、南北に70~80キロほどの四辺形に近い。都市ショレを中心としてその蜂起が展開された。

その直接的な契機となったのは、2月24日に国民公会で決定された三十万人募兵令である。当時オーストリア・プロイセンと戦争状態にあった上、ルイ16世の処刑の後に第一次対仏大同盟が結成され、フランスは窮余の状況にあった。この状況下で、国民公会は全国から男子30万人を徴兵する決断を下した¹²。この法の第16条、17条においては、富裕な者は市町村会の承認を得た上で、武器、装備、服装を自弁することを条件に代理人を立てる事が可能であった。加えて第20条においては全ての行政に関わるものは無条件で兵役を免除されることになっており¹³、これら不平等な募兵令が、多くの農民の反発を買った¹⁴。

だが、問題の本質はこの募兵令に対する一時的不満ではなかった。「行政に関わるもの」は主に都市ブルジョワである事が多く¹⁵、革命以前からの都市ブルジョワ対農民の対立関係に留意する必要がある。モージュを例に見ると、都市/農村間の亀裂の一方には農民、織物工が、もう一方には卸売商、総括徴税請負人らブルジョワが存在した。特に貧しい農民は副業として機織りを行い、その原材料入手先や販路として商人と、市場としての都市に依存していた¹⁶。

加えて、ブルジョワに対する反発は、単に都市/農村対立構造の問題だけではなかった。革命から93年3月にいたるまでに、西部地域に生じた大きな問題として、教会財産の国有化、及びその売却の問題が存在した。1789年11月2日に下されたこの決定は、革命政府の財源の必要性から発されたものである。宗教共同体の持つ財産を売却して国庫の収入とし、聖職禄を一部国家財産に組み入れた。国有化された財産の売却は競売で行われ、外来のブルジョワが大部分を買い取った。革命政府に比較的忠実だったサルト県南西部の教会財産買入れの状況は次のようになる¹⁷。パリニエ・レヴェクでは住民57%、

外来者 43%、サン・マール・ドゥチェでは住民 66-72%、外来者 28-36%、テロシエでは住民 88%、外来者 12%とその土地の在住者の割合が明らかに高い。逆に、反乱に同情的な地域での教会財産の売却は次のようになる。オベール・ル・アモンでは住民の購入 42%に対して外来者の購入が 58%、プレシニエでは住民 33%、外来者 67%、サン・ドニ・ドルクでは住民 25%、外来者 75%、さらにソレムに至っては住民 5%に対し外来者 95%と、ほぼ買占めに近い状況である。その住民の中でも、実際の耕作者の割合はさらに少ない。耕作者割合はそれぞれにおいて 22%、10-15%、4-18%、2-3%である¹⁸。その土地の住民は教会財産を半分以下しか買い取ることができなかった。都市のブルジョワの買受けの代理人は革命政府の行政官であり、残った部分もパリから来た外来者が入手した¹⁹。ヴァンデ県においても、買い取り人の多くは徴税請負人、ナントやサブルの大商人、医者、公証人、官吏などが多く、その上多くの土地が大きな面積をまとめて一括で売却され、農民にとって不利な状況であった²⁰。他所者の都市民、ブルジョワに対する不満はこういった点でも醸成された。

また、地域によっては租税そのものも革命以前より重くなった地域も存在した。ボワの分析したサルト県では 1790 年に 20 分の 1 税と通常の租税 *impôt* を合わせて 350 万 6 千リーヴルだったのに対して、1792 年には地稅、動産税といったものを総合すると 547 万 3300 リーヴルと見られている²¹。また、新しい租税の割当てに関しても、以前の不完全な課税台帳が利用され、不動産税が純収入の 6 分の 1 と定められているにもかかわらず 2 分の 1 まで高められることがあり、動産税も 18 分の 1 を限度に定めているが 4 分の 1 にまで高まる事もあった。参考に、ショレの不動産税は 91 年に 20 万 8 千リーヴル増、動産税は 44 万 2 千リーヴル増となった²²。封建的特権から農民を解放するはずの革命が、かえって経済的に負担を増大させた。

さらに、宗教的要因として、聖職者俗事基本法の問題が存在する。この法は 1790 年 6 月に採択され、議論を経たのちに 90 年 11 月 26 日に公布される。基本法は従来の教会組織を完全に見直した²³。原案は 4 部からなるが、第 1 部では教区を新しい行政区分に合わせ画定し、司教の数は 130 から 83 に減らされ、伝統的な聖職禄はすべて廃止された。第 2 部では聖職者の任用に選挙制を導入し、有権者による司教・司祭の選出を可能にした。また聖職者は国家から俸給を受ける者として憲法への忠誠宣誓義務を負った。第 3 部、第 4 部はそれぞれ聖職者の報酬と待遇について、及び居住について規定している。新たな教区区分では人口 6000 人未満の市町村はすべて単一の教区を構成する事になったが、ヴァンデにおいて人口 6000 人で教区を維持できるのは中心都市ショレ程度であり、伝統的な教区共同体は破壊されようとしていた²⁴。11 月 26 日の法令で、聖職者は憲法へ、すなわち基本法への宣誓を 2 ヶ月以内に行うよう迫られたが、これを機に分断が始まる。91 年の頭に各地で宣誓の儀式が執り行われたが、ヴァンデ、アルザスや中央高地といったカトリック色の強い地方ではこれに対して宣誓しない司祭が多数で、群衆が実力で司祭の宣誓を拒否させる所もあった。西部フランスではこの傾向が非常に強く、91 年ナントの司教区の記録では、1058 名の司祭または修道士のうち、宣誓を行ったのは 159 名の司祭と 60 名の修道士のみ²⁵、ヴァンデ県では 768 人のうち 207 人が宣誓していたが、蜂起の中心ショレでは 94 名の主任司祭・助任司祭のうち 5 人のみが宣誓した。南部アンジューを見てみると、モージュでは割合にして 8%、レヨンでは 35%、ソミュー

ルでは53%が宣誓しており、非宣誓聖職者が多いほど革命に対抗する動きが強くなる傾向が見られる²⁶。政府はこうした非宣誓聖職者を職務放棄者とみなし、教区から追放しようとし、宣誓聖職者を新たに任じた。これに反発する人々は宣誓司祭を「侵入者 intrus」「無資格僧 truton」などと呼んで受け入れを拒否した。秘蹟の授与においても、新生児の洗礼は、助産婦による略式洗礼と、その後内密にやってくる非宣誓司祭が待たれ、宣誓司祭の秘蹟はボイコットを受けた²⁷。

ラ・ロシュジャ克蘭侯爵夫人によれば²⁸、革命に対して「ボカージュの住民は、これらの変化のすべてを怖れと悲しみをもってみた。この変化は彼らの幸せを増すどころか、脅かすばかりだった。(中略)農民は日ごとに新しいこととなりゆきに不満をつのらせ、貴族たちに一層尽くすのだった²⁹」。貴族出身の彼女の回想である事を割り引いたとしても、西部地方においては未だに、アンシャン＝レジームの領主農民関係、小教区共同体は一体性を持っていた。こうした住民と、その生活共同体の「侵入者」である宣誓司祭、そしてこの聖職者の問題を発生させた革命政府への反発が精神的に高まっていた事が、ヴァンデを革命から分離させることになった。

そもそも、ヴァンデの民衆は、フランス革命そのものに対して根本的に反発していた訳ではない。1789年時点では、ヴァンデでその後蜂起する事になる人々も、特権身分の租税特権の廃止や、修道会の所得の国家への返還、いくつかの修道会の廃止を求めている事もあった。1788年の陳情書でも領主権と、封建制の名残に対する反発も見られる。しかし、そうした状況だったはずが、以降革命により経済、政治、宗教的圧迫、破壊を受けて不満を蓄積し、93年には一転蜂起へと変貌を遂げる。反革命の象徴たる「武装したヴァンデ Vendée militaire」は、革命によって作り出された³⁰。共和派の歴史家にとって、教会によって女たちを通して狂信を吹き込まれた存在がヴァンデであり、反乱は、恩知らずかつ不正義の、愚かな現象であった³¹。確かに反革命的な貴族・僧侶による民衆の煽動に加え、封建制を利用する形で生活していた者、例えば通関税廃止に伴う税関吏の失業者、塩税廃止により打撃を受けた密輸業者や塩税収税人などが反革命指導者になった。だが、無知な民衆を煽動する反革命指導者による陰謀論に反乱の原因を帰する伝統的な解釈は、今日ではその主要な原因とはみなされず、民衆の自発性が認められている。

貴族は積極的に煽動したというよりもむしろ、民衆に請われて指導者となった³²。サピノー侯爵は村人に指導者になる事を請われ最初はこう返答した。「我が友よ、勝負は始めからついている。1県で82県に対抗するのだ。我々は鎮圧されるだろう。(中略)諸君、家に帰らたまえ。私は無益にあなた方を失いたくないのだ³³。」また、ポーブロー城主デルベも「この戦いは土器で鉄の壺に挑むようなものだ！」と村人を諭したという³⁴。王党軍の中核となる貴族が、このように蜂起に慎重だったという逸話が複数存在していることから、陰謀と煽動がメインに据えられた以前の研究は明らかに現実的ではない。住民が自発的に立ちあがり、自主的に貴族や名士を指導者に迎え、反乱を拡大させたのである。経済、社会、宗教と複数の面から積み重ねられた住民感情が、さらなる重圧である30万人募兵令を直接的な契機に、住民の、革命に対する異議として爆発し、ヴァンデ戦争へと至るのである。

(2) 戦争の経過

以上のような背景をもって勃発したヴァンデ戦争が、どのような経緯を辿って進行したのかを概観しよう。先述のように、徴兵に対する反発を直接の引き金として反乱が始まる。この反発自体はフランスの農村の至る所で起こったが、多くはすぐに鎮圧された。ロワール下流の南側、モージュやボカージュのヴァンデにおいて、事態は深刻化する。最初の騒擾は、1793年3月4日だった。ショレにて徴兵に反発する徴兵対象者たちの集団が騒動を起こして国民衛兵のパトロールと小競り合いになり、両者ともに死傷者をだした。一週間後、3月10日から11日、西部各地で反乱が始まる。公文書が焼かれ、公庫も空にされた。それぞれの教区で指導者が蜂起集団に擁立されてゆくが、初代総司令官となるカトリノーもその一人であった³⁵。イゼルネでも500人の人々がストフレを指導者に仰ぎ14日にはショレに入った³⁶。13日ショレとサン・フロランの間のボープローでの蜂起では、ボープロー城の城主デルベが指導者とされた³⁷。ヴァンデ県北東部にあたるレ・ゼルビエでもサピノー侯爵が指揮官として擁立され、周囲に攻撃がかけられる。ここから約10日間のうちにモージュのほぼ全域へ広がり、小集団も徐々にまとまっていく。その集合もストフレやカトリノー、ボンシャンらを指揮官とし、ショレに本拠置く主力軍と、サピノーらがレ・ゼルビエに拠点置く中部軍、またシャレットらが指揮を取り、かなり独自に行動を取っていたレ・下ポワトゥ地方軍に大きく分かれていたが、編成については次章で詳述する³⁸。

3月はそれ以降も引き続き付近の都市から国民衛兵を掃討した。だが共和派も抵抗した。19日、国民公会は反徒に関する布告の中で、反徒に対し「法の外に置く」厳格な態度を表明した。実際の対応は不十分であり、ヴァンデ軍側の勢いを止める事はできなかった³⁹。4月に入ると革命政府もヴァンデの事態を重視し始め、大規模な戦闘が増えることになる。11日、ショレの北東20キロほどのシュミーエで、合計約3万を幾つかの部隊に分け、包囲を試みる共和軍と、ほぼ同数のヴァンデ軍が激突する。勝利を得たのはヴァンデ軍であった⁴⁰。17日にはショレを一時奪取されるが、20日には再奪回を達成する。シュミーエでの戦闘と同時期、後に3代目の総司令官になるラ・ロシュジャ克蘭がレ・ゾービエの共和軍を敗走させ、主力軍に合流する⁴¹。またブルーールらが沿岸部の都市で兵を上げ、シャランに達した。シャレットはヴィエイルヴィニューに自身の拠点を築き、やや内陸部を制覇した。5月に入ると、5日にはトゥアールを陥落させ、16日と25日の2度の戦闘でフロントネ・ル・コントを奪取する。戦闘は、反乱側が各地の群衆を動員したため大規模化した⁴²。こういった局面で既に、トゥアール戦の共和軍指揮官であったケティノー将軍に対し、デルベ以下6名の指揮官の署名入り通行許可証が渡され釈放されたという事例もあり、ただの無秩序で残虐な農民反乱という段階ではないという側面も示している⁴³。フロントネ奪取後、主力軍はその北東のソミュールを目指した。その途上ドゥエ、モントルイユ・バレ、シノンで共和軍を撃退、6月9日にはソミュール攻撃をかけ、制圧を達成した。主力軍がソミュールに駐屯する間、シャレットは独自にマシュクールを占領した。17日、主力軍はソミュールを発ち、アンジェ攻略に向かうが、19日には全軍が、共和軍が逃亡したために戦闘なしでアンジェ入りを果たした⁴⁴。この時点では、ヴァンデ軍側は敗北を喫する事もあったとはいえ、大勢では共和軍を圧倒していた。

6月29日のナント攻撃は失敗に終わる。ここでは、都市の出入り口をヴァンヌ街道以

外全て封鎖し、そこから敵を敗走させる算段であったが、タルモンが命令無視をし、敗走する共和軍を市中に押し戻してしまった。その後の戦闘でカトリノーが致命傷を負い、ヴァンデ軍が敗走する。シャレットも同時に単独行動を取っていたうえ、サピノーも独断によってこれに付随する攻撃を失敗、各々の戦術に一致は見られなかった⁴⁵。彼は数日後に亡くなるが、結果的にこの失敗は反乱全体の戦局の転換点となり、徐々に防戦に転じていく。思いがけぬ勝利に共和軍は勢いづき、ウェステルマヌ將軍は7月1日にレスキュール不在のクリソン城に火を放ち、ブレシュイールを奪回。2日にはシャティオンを攻撃し3日には陥落させたが、5日には撃退された。ここでは砲兵指揮官マリニイが命令違反の残虐行為を行っている。18日、王党軍のヴィイエ占領で王党軍の勢力範囲が確定する⁴⁶。19日にデルベが2代総司令官に就くが、その後30日、8月13日とリュソンで敗戦、サピノーが戦死する。共和軍側はその後、11万6千の「西部共和国軍」、中でもライン沿岸からこの地域に転戦したマインツ部隊によって主導権を握る⁴⁷。マインツ部隊の到着は9月1日で、王党軍に対する攻撃は、9月の間、コロソ、トルファー、モンタギユ、サン・フルジャンで仕掛けられる。この間もシャレットは主力軍とは作戦を共にせず、単独行動を取った。10月11日、共和軍がシャティオンを奪取。12日、デルベは王党軍をショレに集結させるが、シャレットのみが単独行動でノワールムチエ島を占領する。17日、ショレにて両軍が激突し、王党軍は北部に向けて敗走、レスキュール、デルベ、ボンシャンは重傷を負い、この戦闘の後ラ・ロシュジャクランが総司令官となる。翌18日パニックの中で、指揮官の間での意見がまとまらないままに、ロワール川を渡河。「ギャレルヌの転戦」と呼ばれる漂流戦の開始である。スグレ、シャトー・ゴンティエ、ラヴァル、マイエンヌ、エルネ、フジュール、ドル、ポントルソン、アヴランシュといったブルターニュの街々を通過し、約1カ月を要して、11月14日には港町グランヴィルに到達する。イギリス軍の援助を期待してであったが、グランヴィル攻略には失敗した上、イギリス軍は現れる事はなく、再び元のヴァンデ地域を目指して南下を続けることになった⁴⁸。この時点で既に秋の風雨、飢餓、病、度重なる敗戦に苛まれていた。12月3日から4日にかけて、ロワール再渡河の足掛かりにしようとしたアンジェの攻略に失敗、12月13日、ル・マンで大打撃を受け、23日サヴネーではほぼ壊滅状態に陥る。転戦初期8万とも呼ばれた王党派は4千ほどまで減っていた⁴⁹。指揮官も散り散りとなり、シャレットなどはまだ抵抗を続けるが、既にこの時点でヴァンデ軍に対する共和軍の勝利は達成された⁵⁰。戦闘が完全に終わったわけではなく、残存兵力が野戦を行い小規模な抵抗を続けるが、「戦争」と呼べる規模の反乱は終結を見ることになる。

2. カトリック王党軍の組織

(1) カトリック王党軍の組織構成

カトリック王党軍は、ヴァンデ戦争における反乱軍の名称である。文字通り、「カトリック」と「国王」という旧体制の象徴を掲げた命名だ。とはいえ、蜂起の最初からこの彼らにこの名称が用意されていた訳ではない。3月14日、ショレに対して軍（この段階では蜂起した群衆だが）を進めるストフレの宣言を見ると、「ショレ住民に対し、彼らの武器を、3000を越すキリスト教軍の指揮官たちに引き渡すよう厳命する。ただし、今回に限り、人身と財産に危害を加えることはない。指揮官ストフレ 従軍司祭バルボタ

ン⁵¹」とあり、この時点で彼らはキリスト教軍をなのってはいるが“王”への言及はない。一方で、シャランの町で蜂起した民衆軍は、その行政官に対して武装解除を要求する手紙の中では、「シャランで構成された王党軍」と記されており、こちらはカトリックへの言及がない⁵²。はっきりとした形で、その名称にカトリック的要素と王党派的要素が出現するのは、5月10日にパルトネ入りした軍が住民に対して発した宣言の中で、「われわれ、カトリック王党軍の指揮官は、わが父、真の聖職者の宗教の指示と、わが尊厳なる主権者ルイ 17 世にその王位と王権の光輝や堅固を奪回させるためののみ、武器を手にしたに他ならない⁵³。」と示されて以降である。また、マルタンは、サピノーとロワランが指揮官に迎えられヴァンデ県を中心にカトリック軍の核を結成、その3週間後にアンジューでカトリック、ボンシャン、デルベがカトリック王党軍を創設すると述べており⁵⁴、「王党軍」というのは蜂起民衆のうちにもともとあったというよりは、指揮官らが合流し、軍に参加する民衆を統合する上で持ち込まれた観念であったと言えるだろう。実際に王と神を復興させるというよりは、貴族、都市民、農民といったあらゆる種別の人々を結びつけるためのものであった⁵⁵。

その王党軍の組織構成について本章では検討する。5月27日フォントネ占領後、まずはその政治上の最高機関である最高会議 *Conseil Supérieur* が、その支配領域内の司法と行政の混乱を回復すべくシャティヨンに設立される⁵⁶。構成は次のようになっている。議長にアグラコ主教⁵⁷、副議長にラ・ロシュフーコー、国王検事、カリエール、書記ジャゴ、パール。その他のメンバーが、サン・ローラン教会司祭のブラン、アンジェのサン・ルー教会司祭ベルニエ、デゼサル、モルターニュの司祭ブティリエ・デ・オメル、ブラソー、弁護士のみシュラン、パイヨンといった面々で、25名で構成された⁵⁸。デゼサルのような軍指揮官もいたが、聖職者や弁護士が中心であり、その宣言には国王ルイ 17 世の存在が全面に出ている⁵⁹。最高会議は、小教区を単位とする、教区におかれた教区会議 *conseil provisoire d'administration* あるいは軍事委員会 *comité militaire* を統括下に置いた⁶⁰。これらの会議は蜂起に参加、あるいは少なくとも蜂起を容認した名士 3~9 名で構成され、各教区での問題に対処する他、愛国派の警戒などが責務であった⁶¹。以前の共和国行政官の間から人員が選ばれた場合もあったし、王党軍の指揮官によって指名される場合もあった。初期の蜂起地域と6月までに獲得した地域では多少の違いがあったとされるものの、委員会の役割はかなり大きく、宗教的姿勢を監視し、人員や糧食の徴発を担い、軍事貢献への参加が足りない場合は罰を与え、被疑者へは王への宣誓を課した⁶²。

一方、軍組織の面を見てみよう。6月9日ソミュール占領を達成すると、指揮官会議でカトリックが総司令官に任命された。その時の編成は次のようになっている。まずは上ヴァンデ軍、第1師団、地域はサン・フロラン、ロワール沿岸、指揮官カトリック、ボンシャン、兵数1万2千。第2師団、地域ショレ、ポープロ、指揮官デルベ、兵数9千。第3師団、モレヴリエ、指揮官ストフレ、兵数3千。第4師団、シャティヨン、指揮官ラ・ロシュジャクラン、兵数7千。第5師団、ブレシュイール、指揮官レスキューール、兵数6千。第6師団、アルジャントン、指揮官ログルニエール、兵数2千。続いて下ヴァンデ軍、第7師団、地域はモンテギユ、モルターニュ、ラ・シャテニユレ、指揮官ロワラン、サピノー、ボドリ・ダソン、兵数1万。第8師団、レ(Retz)、指揮官カト

リニエール、兵数2千。第9師団、マレ、指揮官パジヨ、兵数1千8百。第10師団、サン・フィルベール、指揮官クエタ、兵数1千7百。第11師団、シャラン、指揮官グエリ・ド・クロージ、兵数1千9百。第12師団、ヴィエイルヴィニユ、サン・シュルピス、指揮官ヴリノー、兵数2千。第13師団、パロー、指揮官サヴァン、兵数1千6百。第14師団、サブル、指揮官ジョリ・ド・ラ・シャペル、兵数2千⁶³。

第1~6師団が最高司令官カトリノー、のちデルベ、ラ・ロシュジャ克蘭、ストフレ、ドーティシャンらに、アンジュー、上ポワトゥ地方で主力軍として率いられた。第7師団がヴァンデ中部軍を構成し、残りが下ポワトゥ軍といった構成であった。主力は大きくこれら3つの軍に集結していた。少数がこれとは別に、この3つの軍から半ば独立した部隊を形成していた。その中にはアンシャン・レジームからの兵士であるスイス兵やドイツ兵が1千ほど存在した。この師団毎の指揮官配置とは別に、マリニイは砲兵隊指揮官、ストフレは参謀、ドメーニュやタルモンが騎兵隊指揮官、ドニサンが獲得地域の総督、といったように専門的な指揮官任命も行われたが⁶⁴、後述するが、これらは厳格に運用されない上、指揮官同士の序列も曖昧であり、軍事組織は理論上のものに留まった⁶⁵。このように、最高会議による指揮官任命を通して王党軍に権威を与えようとし、軍としての体裁を整えようという努力が見られる。

王党軍は、フュレの表現では「奇妙な軍隊」であった⁶⁶。農民、織物工、田園部の名士といった雑多な種別の人間からなる集団であり、その参加者の構成は次のようである。

王党派への参加があった者で、職業が判別した者の割合(%)⁶⁷

	サン・フロラン	ショレ	ヴィイエ	アンジェ	その他
貴族	0.7	0.4	0.3	8.2	6.4
聖職者	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0
賃労働農民	9.6	6.5	18.0	4.1	8.1
その他の農民	42.8	30.0	34.3	55.1	36.3
商業ブルジョワ	4.0	7.6	3.5	6.1	2.4
その他ブルジョワ	6.6	2.3	1.6	2.0	4.0
職人	12.9	25.9	9.0	2.0	10.5
その他	22.3	27.4	33.3	22.4	32.3

農民や職人を中心に多くの階層の人々が参加している。その上、1つのカテゴリー内の人々も一枚岩とは言えない⁶⁸。要するに相当雑多な人間の集まりだった。これらの構成をもった王党軍という組織が、いかにして民衆を動員し、反革命の象徴となる「武装したヴァンデ Vendée Militaire」を作り出すにいたったのか、その王党軍の強みと、それを持続する事が出来なかった弱点について次に検討する。

(2) カトリック王党軍の強みと弱み

参加者の構成自体はばらばらであり、寄せ集めの軍隊でありながら、3月に始まった蜂起は10月までは支配領域を保ち続けた。農民を中心とした蜂起としてのイメージが先行するヴァンデではあるが、初期の散発的な蜂起が過ぎた後では、その軍事的中核はかつての常備軍兵士にあり、彼らは指揮官の下に常駐した。旧王国軍系の投降兵、特に脱走を目的にヴァンデに來たドイツ出身、スイス出身の外国人部隊の兵士、またロワール北岸で敗北した反徒で構成された⁶⁹。彼らは王党軍の作戦行動で中心的な役割を果たした。中には、騎兵も1500-2000騎ほど存在したが、装備は貧弱で、共和軍の竜騎兵や軽騎兵には直接対抗出来なかった⁷⁰。さらに砲兵経験者は一般の兵に大砲の使い方を教えるなど、戦術面でも王党軍に選択肢を広げた。とはいえ、こうした専門的な部隊は少数で、大多数は民衆から招集する即席の軍隊であり、人々は早鐘の音あるいは風車を使った合図で、教区内から選ばれた指揮官の元に集結した⁷¹。こうして集まった兵士は戦闘が終わる、あるいは遠征が長期化する兆しを見せると、指揮官の許可も無く家に帰ってしまった。しかし、こうした流動性の利点は、必要な時と場所でただちに大軍を招集する事が出来た事にある。共和軍が、いつ起こるか予見できない戦闘を控えながら行軍を行うのに対して、王党軍は戦闘の予見された教区付近で合図を出して招集を行った⁷²。

この流動的で種々雑多な軍隊の長所を活かした戦術は、「衝突と生垣 *Le choc et la haie*」である⁷³。「衝突」においてはまず、招集した人員の数的優位で圧倒する。王党軍側が戦闘を行う共和軍の部隊を選び、代わる代わる兵士を招集して共和軍と対面した。対して共和軍は、すぐに散らばる王党軍を追い、戦闘のタイミングと場所の選択権を王党軍に握られた。たとえ敗走する場合でも、必要ならすぐに散り、敵の攻撃から逃れた。潰走すればボカージュの生垣へと消え、被害を抑えた。逆に、攻撃の際には、起伏があり、生垣に囲まれたボカージュで、大砲や重装備で機動力の落ちる共和軍に対して、軽装の王党軍が奇襲をかけた⁷⁴。現地でその都度招集することで大集団を移動させる必要がなく、その装備の貧弱さからくる機動力を、熟知したボカージュの地形において最大限活用する戦術が「衝突と生垣」である。そして、共和軍を敗走させることで、王党軍は戦勝ごとに銃や弾薬、大砲といった武器を回収し、装備を整えて再び共和軍に相対した。

王党軍の強みは、こうした戦術面のみに存在するわけではなかった。ヴァンデにおいては、共同体全体が戦闘に関わった。若者だけでなく、30-40歳前後、ひいては40歳以上の男性も戦闘に加わり、革命に対する反意を示した。女性や子供も、戦争に関わった。だが、国民公会での報告にあるような、女性や子供、老人が主導的な役割を担ったという主張には、ジェラルールによって疑問が呈されている⁷⁵。ジャンヌ・ロバンやルネ・ボルドローのように戦闘に参加した例外を除けば、王党軍における女性・子供・老人の役割は後方支援のものだった⁷⁶。最も重要な役割はスパイである。非戦闘員として振る舞い共和軍に食糧を提供する、あるいは物を売る、といった事を口実に入り込み、その居場所、作戦動向、兵力の状況などを偵察し王党軍の指揮官に報告した⁷⁷。また、女性は特に、看護婦としても貢献した。王党軍はシャティヨン、ショレ、モルターニュ、サン・ローラン・シュル・セーヴルに救護施設を持っていた。王党派であろうと共和派であろうと同様に扱われ、修道女が主として看護にあたったが⁷⁸、農婦や、さらには貴族の女性さえ看護活動に参加した。子供は女性よりもしばしば軍内に見られた。伝令や鼓手、斥候や歩哨として使われたし、貴族の青年の場合はアンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭が革命

前に16歳で少尉であったように、王党軍内で地位に就いた⁷⁹。

このように、女性・子供・老人を含めて補助的な役割を多く担った事は、徴兵拒否問題をきっかけに立ち上がった蜂起がもはや徴兵対象である若い男性に留まらず、共同体全体の問題と化した事の証左であったと言える。共同体全体が抵抗に参加したことによって、王党軍は戦術面以外でも支えられた。一方で、本来は強烈な政治性は持たず蜂起に協力した住民たちは、その後「カトリック王党軍」というイデオロギーに回収されていく事になる。

こうした王党軍の強みは、勝利している間は保たれたが、敗戦と同時に弱みともなった。軍が柔軟で流動的である事は、構成員の激しい入れ代わりと軍律の弛緩を意味した。遠征になれば許可なしに離脱する者が後を絶たず、厳密に規律が守られる事はなかった。軍には隊列も陣形も無く、地の利を活かし大軍によって圧倒する事が戦術であったため、一部の兵士がパニックに陥り敗走すると全体も連動した⁸⁰。加えて装備は貧弱で、サボカ裸足、白い帽章の付いたフェルト帽、毛織の上着に聖心を付け、ロザリオを持ち、長ズボンが典型的なスタイルで、共通の制服は存在しなかった⁸¹。初め、武器は棒きれ、火掻き棒、農業用フォーク、良くて猟銃で、銃を扱える狩人は貴重な戦力であり、多くは農民兵で軍事的知識は一切ない。数的優位を活かした戦勝によって大砲、弾薬、銃を回収したが、敗北が重なると弾薬不足となり、より戦力が落ちる悪循環に陥った。兵站部隊は無く、各指揮官の裁量に完全に依存した。戦費は当初貴族の指揮官の私費に依存したが、戦闘が大規模化すると賄えなくなり、ヴァンデ軍の主要な指揮官のサイン入った手形、また貨幣としては革命政府の紙幣であるアシニャに、ルイ17世の肖像を入れたものが最高会議の下で発行されたが、財政的に苦しい状態を脱する事は出来なかった⁸²。

指揮系統も形式的なもので、実際は指揮官の権限というのは軍全体には及ばず、階級のヒエラルキーも曖昧だった。それは総司令官ですら例外ではなく、例えばシャレットは終始主力軍から独立して戦闘を行っていたし、マリニイはフォントネ攻略の際⁸³、タルモンも6月のナント攻略の際、作戦を無視し攻略失敗へと繋がるミスを犯した⁸⁴。指揮官はお互いに非常に独立的だった。彼らは蜂起初期に、共和軍に対抗するため急造で結び付いた以上に堅固に結び付くことはなかった。もしアンジュー軍が他の軍ともっと強固に団結していたならば、共和軍のさらなる攻撃にも耐え得た、とマルタンは指摘している⁸⁵。指揮官の間での目標の違い、対抗心、嫉妬、能力、社会的な立場の不均衡が団結を不可能にした。カトリノーが初代総司令官に指名されたのは、団結が困難であった事の象徴である。荷馬車引きであったカトリノーは、貴族と平民名士層の間の対立に無関係な唯一の人物であった。指揮官の社会構成は様々で、ラ・ロシュジャ克蘭は宮廷貴族であったし、サピノーは田舎の貴族、デルベは平民領主、ストフレ、カトリノーらは平民だった。主導的役割を果たしたのは貴族で、平民の立場はそれより弱かった。

さらに、社会的地位の格差に政治的な目標の対立が加わり、意志統一はより難しくなった。勿論、「王と神」という広範な目標では一致していたが、蜂起の現実の目的をどこに設定するかで不一致がみられた。マレやポワトゥの指揮官は蜂起した地に留まりそこを保持しようとしたのに対して、アンジューの指揮官はヴァンデを越え、ブルターニュ、パリまでも反乱を拡散させる事を目論んだ⁸⁶。イギリス、及び亡命貴族との連携の問題もあった。10月17日ショレの戦いで敗北後、ロワールを渡河してグランヴィルまで彷徨

徨いつつ転戦したのは紛れもなくこのためだ。ラ・ロシュジャ克蘭はナント攻撃後、ヴァンデ内で戦う事を主張したが、タルモンやドニサンらは北上を主張した。彼らはレンヌまで進軍する事も提案し、結局ラ・ロシュジャ克蘭は主張を譲り、93年の段階では結局動くことのなかったイギリス軍との合流を目指してサン＝マロまで奪取を狙っていたが、兵站もなく、遠征を嫌う農民兵の集団では到底かなわず、ブルターニュを迷走した挙句、ヴァンデへの帰還を決め、結果的に王党軍がほぼ壊滅する事態になった⁸⁷。

こうしたヴァンデ内部の不統一は、その装備、兵站といった物質面と同等かそれ以上に重大な王党軍の欠点であった。各指揮官は限られた連携しか取る事はなく、最高会議や詳細な軍の構成はそれを必死で取り繕おうと試みる努力であった。王党軍は、統一へ向け努力したにもかかわらず、各々の支配領域を持つ指揮官とその軍隊の連合以上のものではなく、「神と王の旗の下で共和軍に対抗する統一集団としての王党軍」はイメージに過ぎない。こうしたヴァンデのイメージが生じたのは、革命政府が民衆の抵抗を貴族・聖職者の陰謀によるものとみなした事が大きい。蜂起と弾圧が山岳派独裁の時期に重なり、「反革命の陰謀」が彼らの独裁、暴力的な対処・テルールを正当化するプロパガンダに利用された事にその大きな原因がある⁸⁸。ヴァンデ・ミリテールは革命政府にとって、反革命を体現するものとして悪魔視され、反革命のシンボルとなった。だが、王党軍の実情は、組織化された軍隊というよりも、むしろ伝統的な農民蜂起を継承した連帯であった。

結びに

これまで見てきたように、ヴァンデ戦争は、聖職者俗事基本法による教区共同体の破壊、信仰の剥奪といった宗教的不満の醸成、経済的な負担感の増大による反発、国有財産売却による共同体外からの侵入者の存在、こうした複合的な要因が結び付き、30万人募兵令を直接的な引き金として住民感情が爆発する形で始まった。王党軍は小教区を基本とした軍の単位によって、招集と散開が非常に柔軟に行われた流動的な軍隊であった。柔軟性と地理的優位を存分に利用して、不慣れな土地の行軍に疲弊した共和軍を撃破した。女性・子供・老人の協力を含めた共同体全体の支援を受け、地域全体で共和軍を脅かした。大軍ながら実像のつかみにくい王党軍が、地域全体での抵抗と重なる事により、共和軍、革命政府が、アンシャン＝レジームの復活である「王と神」のイデオロギーと結びついた、強烈な反革命イメージを持ったヴァンデ像を作り上げる要因となった。しかし実際には、貴族や名士を中心とする王党軍の指導者によって指揮され、組織化が試みられたが、その凝集は、決して「カトリック王党軍」という、旧体制のイデオロギーを強く提示した名前から連想されるほど強固ではなかった。大部分をなす農民兵にとって、反乱はそれ以前の農民蜂起、すなわち自分達の意思を表明しようとする伝統的暴力手段に基づいたものであり、彼らは自分の土地を離れようとはしなかった。貴族層を中心とする指揮官は、アンシャン＝レジームの旗印の下、反乱の拡大、遠征を試みた。加えて指揮官毎の対立が存在し、実態として王党軍の各担い手たちの目標は明確になっていなかったのである。以上の事から考慮して、伝統的農村共同体を継承した民衆の認識と、革命政府の王党軍に対する認識の間の乖離が明確に存在していたと言えよう。

《註釈》

- 1 フランソワ・フュレ、モナ・オズーフ（河野健二他監訳）『フランス革命事典 1—事件』みすず書房、全7巻、1998-2000年、46頁。
- 2 Martin, J.-C., *La Vendée et la France*, Paris, 1987, pp.312-317.
- 3 田中久美子「フランス革命におけるヴァンデ戦争の史的位置」『史窓』62、2005年、77頁。
- 4 研究史については Petitfrère, C., « Les causes de la Vendée et de la Chouannerie. Essai d'historiographie », *Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest*, 84-4, Rennes, 1977.（以下 *Les causes de la Vendée* と略記）を参照した。
- 5 田中前掲論文、77-78頁。
- 6 Bois, P., *Paysans de l'Ouest : des structures économiques et sociales aux options politiques depuis l'époque révolutionnaire dans la Sarthe*, Le Mans, 1960, rééd., 1971.
- 7 Tilly, C., *The Vendée: A sociological Analysis of the Counter-Revolution of 1793*, Cambridge, 1964, 3rd ed., 1976.
- 8 Petitfrère, *La Vendée et les vendéens*, Paris, 1981.
- 9 Sutherland, D.M.G., *The Chouans: the social origins of popular counter-revolution in Upper Brittany, 1770-1796*, Oxford, 1982; Le Goff, T.-J.-A., *Vannes and its Region*, Oxford, 1981. [cit. dans Forrest, A., « Le regard étranger: la Vendée dans l'historiographie anglo-saxonne » dans Bérce, Y.-M., *La Vendée dans l'histoire : actes du colloque*, Paris, 1994, p.183 n.21].
- 10 ミシェル・ヴォヴェル（立川孝一ほか訳）『フランス革命の心性』岩波書店、1992年、364-365頁。
- 11 フュレ前掲書1巻、56頁。
- 12 第1条に「満18歳以上41歳未満にして未婚または子のない独身男性であるすべてのフランス市民は、このあとに法令で示される30万人の兵員を補充し終わるまでは、いつでも徴兵に応ずるよう待機しているものとする。」とあり、該当する男子は徴兵の義務を負った。河野健二編『資料 フランス革命』岩波書店、1989年、332-335頁。
- 13 河野同書同箇所。森山軍治郎『ヴァンデ戦争:フランス革命を問い直す』筑摩書房、1996、62頁。
- 14 田中前掲論文、79-80頁。
- 15 Sutherland, D.M.G., *France 1789-1815 : revolution and counterrevolution*, New York, 1986, pp.166-172.
- 16 Martin, *La Vendée et la France*, Paris, 1987, pp.63-64.
- 17 Bois, *op. cit.*, pp.339-342.
- 18 Bois., *op. cit.*, p.338.
- 19 小林良彰「ヴァンデー反乱の経済的原因」『同志社商学』22-3、1970年、53頁。
- 20 小林前掲論文、54-55頁。
- 21 Tilly, *op.cit.*, pp.322-326.
- 22 小林前掲論文、55頁。
- 23 フュレ前掲書4巻、243-248頁。
- 24 森山前掲書、54頁。
- 25 Secher, R., *Le génocide franco-français : la Vendée-Vengé*, Paris, 1986, pp.243-244.
- 26 Tilly., *The Vendée: A sociological Analysis of the Counter-Revolution of 1793*, Cambridge, 1964, 3rd ed., 1976, pp.236-241.
- 27 Martin., *op.cit.*, pp.71-72
- 28 ラ・ロシュジャクラン侯爵夫人は、91年10月、のちのカトリック王党軍2代目司令官レスキユール侯爵と結婚、後1802年3月に、カトリック王党軍3代目総司令官アンリ・ド・ラ・ロシュジャクランの弟であるルイと再婚した人物。常にヴァンデ指導者と同じ位置にいた人間として、『回想録』はヴァンデ戦争の貴重な史料である。西節夫「ガレルヌの彷徨を追って:ラ・ロシュジャクラン侯爵夫人『回想録』抄」『ヨーロッパ文化研究』9、1990年、41-60頁。
- 29 フュレ前掲書4巻、55頁。
- 30 Brégeon, J.-J., « Les Guerres de L'Ouest », dans Tulard, J., et Benoît, Y., *La Contre-Révolution*, Paris,

1990, p.204.

- ³¹ Petitfrère, « Les causes de la Vendée et de la Chouannerie. Essai d'historiographie », *Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest*, 84-4, Rennes, 1977, p.76.
- ³² Huchet, F., « Les premiers jours de la guerre de Vendée en Maine-et-Loire(2-22 mars 1793). Analyse d'une insurrection », *Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest*, 95-1, Rennes, 1988, p.61
- ³³ Petitfrère, *La Vendée et les vendéens*, Paris, 1981, p.22.
- ³⁴ 森山前掲書、68-69 頁。
- ³⁵ ジャック・カトリノー Jacques Cathelineau は元荷馬車引きで、パン・アン・モージュ教区、ベルフォンテーヌ教会を代表する信徒総代であった。6月9日カトリック王党軍初代総司令官となるが、同月29日のナント攻撃の際致命傷を負い7月14日に亡くなる。Martin, *Blancs et bleus dans la Vendée déchirée*, Paris, 1987, p.63. (以下 *Vendée déchirée* と略記)
- ³⁶ ジャン・ニコラ・ストフレ Jean Nicoras Stofflet はロレーヌ出身の旧兵士で、モーレヴリエ伯領の森番となっていた。蜂起の最終段階まで指揮官として抵抗を続けるが、96年2月25日に逮捕され、処刑される。森山前掲書、68-74 頁、292-315 頁。
- ³⁷ モーリス・ジゴ・デルベ Maurice Gigot d'Elbée はドイツ生まれの家系で、元々ザクセンで士官。反乱の当初ボーブロー城主で彼は、蜂起の指導者となることに否定的であったが、繰り返しの説得を受け指揮官となった。カトリノーの死後は2代目の王党軍総司令官となるが。ヴァンデ最大の激戦であるショレの決戦で重傷を負い、療養中に共和国軍に捕えられ、1794年1月に処刑される。Martin, J.-C., *Vendée déchirée*, p.58. 森山前掲書、69-72 頁、256-261 頁。
- ³⁸ フランソワ・アタナス・シャレット・ド・ラ・コントリ François Athanase Charette de la Contrie は貴族の生まれで、79年には16歳で海軍軍人としてアメリカ独立戦争に参加。90年には退役するが、8月10日事件にはラ・ロシュジャ克蘭同様テュルイリー宮の防衛にあっていた。指揮官として参加するが、独自行動色が強い。最後まで抵抗するが、1796年3月29日にナントで処刑された。Martin, *Vendée déchirée*, p.56. 森山前掲書、83-89 頁、311 頁。
- ³⁹ この布告は、蜂起に参加していた者、白い徽章を身につけていた者、また他のあらゆる反乱の兆候をもつと判断されたものは全員、裁判所における簡単な尋問の後24時間以内に処刑されると規定したもの。田中前掲論文、83 頁。
- ⁴⁰ De Bourniseaux, P.-V.-J., *Histoire des guerres de la Vendée et des Chouans depuis 1792 jusqu'en 1815*, tome1, Paris, rééd., Genève, 1979, pp.356-360.
- ⁴¹ アンリ・ド・ラ・ロシュジャ克蘭 Henri de La Rochejaquelein は、サン・トーバンの北、デュルブリエール Durbelière 城で、1772年に生まれた。士官学校で学び10代で少尉、革命後の91年11月には近衛兵となり、テュルイリー宮で8月10日事件の際もルイ16世を守った。事件後地元へ逃れ、蜂起勃発によりヴァンデ軍へ参加する。デルベが重傷で療養に移った後王党軍3代目の総司令官となるが、既に敗戦色が濃く、転戦を続けた後94年1月28日、21歳の若さで戦死。森山前掲書、110-112 頁、292-295 頁。Martin, *Vendée déchirée*, p.59.
- ⁴² Martin, *La Vendée et la France*, pp.93-94.
- ⁴³ 森山前掲書、119 頁。
- ⁴⁴ Martin, *La Vendée et la France*, pp.93-94.
- ⁴⁵ 森山前掲書、200-205 頁。
- ⁴⁶ およそ北にサン・フロラン、南にラ・ロシュ・シュル・ヨン、シャントネ、ラ・シャテニューレを結ぶライン、西にリル・ド・ブワン、東をヴィイエとする領域。森山前掲書、207 頁。
- ⁴⁷ 内訳はマインツ部隊2万4千、ラ・ロシュエル沿岸部隊4万1千、シュルブール沿岸部隊1万5千5百、ブレスト沿岸部隊3万5千3百。田中前掲論文、86 頁。
- ⁴⁸ 西前掲論文、41-60 頁。
- ⁴⁹ フュレ前掲書1巻、51 頁。西前掲論文、46 頁
- ⁵⁰ Martin, J.-C., *La Vendée et la France*, pp.184-186.
- ⁵¹ 森山前掲書、70 頁。
- ⁵² 同書 88 頁。
- ⁵³ 同書 120 頁。
- ⁵⁴ Martin, *La Vendée et la France*, p.101.
- ⁵⁵ De Bourniseaux, *Histoire des guerres de la Vendée et des Chouans depuis 1792 jusqu'en 1815*, tome 1, Paris, 1819, rpt., Genève, 1979, p.307.
- ⁵⁶ 3月26日の段階で既に作られていた組織が補完、再編成されたものである。Ibid., p.312.

- Martin, *La Vendée et la France*, p.107.
- ⁵⁷ 本名をギヨ・ド・フォルヴィル Guillot de Folleville というが、偽司教であった疑いが極めて強い。94年1月にアンジェで処刑。彼の正体に関しては解明されていない。森山前掲書、139頁。
- ⁵⁸ De Bourniseaux, *op.cit.*, pp.312-313.
- ⁵⁹ 森山前掲書、135-136頁。
- ⁶⁰ Martin, *La Vendée et la France*, p.105.
Petitfrère, « Conseils et capitaines de paroisse : des comportements démocratiques en vendée ? », dans Bérce, Y.-M., *La Vendée dans l'histoire : actes du colloque*, Paris, 1994, pp.67-80.
森山前掲書、176頁。
- ⁶¹ Martin, *La Vendée et la France*, pp.105-107.
- ⁶² Martin, *loc.cit.*
- ⁶³ De Bourniseaux, *op.cit.*, p.280.
- ⁶⁴ *Ibid.*, pp.282-299.
- ⁶⁵ Martin, *La Vendée et la France*, p.102.
- ⁶⁶ フェレ前掲書1巻、48頁。
- ⁶⁷ Tilly, *The Vendée: A sociological Analysis of the Counter-Revolution of 1793*, Cambridge, 1964, 3rd ed., 1976, p.327.
- ⁶⁸ 例えば、比較的大きな定額借地を持つフェルミエ *fermier*、分益小作農メテイエ *métayer*、小規模な小作地のクロジエ *closier* やボルディエ *bordier* など、賃金労働を行う農民とそうでないもの以外の間にもある程度の格差は存在した。森山前掲書、44-47頁。
- ⁶⁹ Martin, *La Vendée et la France*, p.117,126.
- ⁷⁰ Martin, *Vendée déchirée*, p.53.
- ⁷¹ Martin, *Vendée déchirée*, pp.43, 53.
- ⁷² Martin, *La Vendée et la France*, p.125.
- ⁷³ *Ibid.*, p.127-129.
- ⁷⁴ Martin, *La Vendée et la France*, pp.128-129.
- ⁷⁵ 森山軍治郎「ヴァンデ戦争の相対化—90年代地域住民の記念意識における変容」『専修大学北海道短期大学紀要 人文・社会科学編』32、1999年、386-387頁。
- ⁷⁶ Martin, *La Vendée et la France*, p.117. 森山前掲書、173-175頁。
- ⁷⁷ 森山前掲書、167-170頁。
- ⁷⁸ De Bourniseaux, *op.cit.*, p.304.
- ⁷⁹ Martin, *La Vendée et la France*, p.118.
- ⁸⁰ *Ibid.*, pp.129-130.
- ⁸¹ Martin, *Vendée déchirée*, p.50.
- ⁸² Martin, *La Vendée et la France*, p.114. 森山前掲書、191-195頁。
- ⁸³ 本稿前章参照。Martin, *Vendée déchirée*, pp.54-64.
- ⁸⁴ 森山前掲書、202頁。
- ⁸⁵ アンジェー軍とは主力軍の事である。Martin, *La Vendée et la France*, p.102.
- ⁸⁶ *Ibid.*, p.104.
- ⁸⁷ De Bourniseaux, *Histoire des guerres de la Vendée et des Chouans depuis 1792 jusqu'en 1815*, tome 2, rpt., Genève, 1979, pp.133-159. 森山前掲書、237-238頁。
- ⁸⁸ 田中前掲論文、93-94頁。